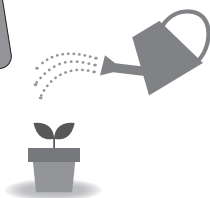


今月の ブックトーク



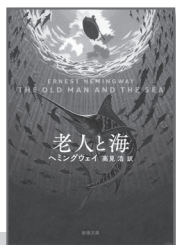
7月(文月)「海の日」

前田 由紀

／渋谷教育学園渋谷中学高等学校司書教諭

もうすぐ夏休みですね。「海の日」は、1996年7月20日に祝日として施行され、2003年から連休化のため、第3月曜日となりました。そこで、今回は、海にまつわるお話です。

まず、アメリカの作家ヘミングウェイの代表作『老人と海』です。1952年に出版され、大評判となり、1954年にノーベル文学賞を受賞しました。主人公は、キューバの老いた漁師でメキシコ湾流の沖合で



ヘミングウェイ・著
高見 浩・訳
新潮社

漁をしています。84日間不漁の不運を嘆いていましたが、85日目ようやく大きな獲物に出会います。一人漁をする老人は、おなじみの海の生きものたちと会話をします。広大な海原と一人対峙し、自然と一体化する老人の姿が、心を打ちます。弱肉強食の自然界の残酷さに息をのみますが、彼の老練な漁師の気高さを敬愛する少年の存在は温かく、美しいです。

次は、『藍を継ぐ海』。この小説は、5つの短編から成り、表題作は、徳島の姫ヶ浦海岸のアカウミガメの産卵場所が舞台。孤独な中学生、沙月とウミガメの関係が描かれます。ウミガメは、一回に100個ほど産卵しますが、孵化後ほとんどが捕食され、わずかに残った子ガメが、黒潮に乗って外洋に出ます。そしてカルフォルニア沖にまで達し、また産まれた場所にもどってくる



伊予原 新・著
新潮社

そうです。その年数が30年にもなる子ガメの長旅は、なんとも壮大です。その他の短編は、山口の萩焼、奈良のニホンオオカミ、長崎の浦上天主堂、北海道紋別の隕石の話であり、日本各地を歴史的に振

り返ることができ贅沢な読書となるでしょう。

さあ、実際に海にも出掛けてみましょう。旅のお供に『海に見える無人駅：絶景の先にある物語』です。日本全国のホームからの海の眺めが優れている厳選した30駅の紹介です。

地方に行くと無人駅が増えてきましたが、一昔前は大勢の人々が行き来していた駅も多かったでしょう。駅員がいないひっそりとした駅にもそれぞれ物語が詰まっています。

根府川駅の項目では、茨木のり子の詩「根府川の家」からの引用、「沖に光る波のひとひら ああそんなかがやきに似た 十代の歲月～」から始まります。この駅は、関東大震災で旧根府川駅ホームが崩落し、海底に眠っているそうです。

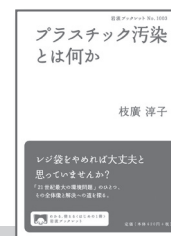
海の浜辺を歩くと漂着物がいろいろとあります。そんな漂着物を探すビーチコーミングという海辺散策がはやっていて、そこで多く見られるのが人工物プラスチック製品です。プラスチックは基本的に分解されないの、海洋汚染として存在し続けるのが大きな問題となっています。微細となったマイクロプラスチックは、生態系も脅かします。

『プラスチック汚染とは何

か』は、プラスチックの増加する消費と廃棄、海洋汚染に対する世界の取り組み、日本の課題など基本的な情報が得られる小冊子です。レジ袋のほかにも漁具、化粧品、合成繊維、タイヤ等の産業まで踏み込んで考えてみるきっかけとなります。



清水 浩史・著
河出書房新社



枝廣 淳子・著
岩波書店
(岩波ブックレット No.1003)

最後のページの： Q1 ② 手であおぐ Q2 ③ 見返り美人図 Q3 ③ 海の日
クイズの答え Q4 ① 苦い水 (「chocolate」(ショコラトール)) という古代アステカ民族の言葉が語源です

※「今月のブックトーク」「図書館クイズ」は、全国学校図書館協議会Webサイトに掲載しています。QRコードより、PDFもご利用ください。



【お詫び】4月号、6月号のQRコードに間違いがありました。7月号のQRコードから以前のデータもご利用いただけます。